

# 本音ぶつける職場

## 迫る2025 シフト

5

### 9部 訪問看護師の力

今回の連載で採り上げている横浜市鶴見区医師会在宅部門には、三つの訪問看護ステーションがある。同区は市の北東部にあり、西区は港北区や神奈川区、東は川崎市と接する。人口は約28万2千人で、65歳以上の割合は20%。ステーションは、大まかに区の海側を第1、山側を第2、川崎寄り

側などは坂道が多く、かなりハードだ。「訪問をして



いると、太ももに筋肉がつき、パンツが入らなくなるんです」と在宅部門総括責任者の栗原美穂子さん(49)は笑う。

訪問看護師は、第1が14人、第2が11人、第3が7人。ほかに理学療法士3人、事務職員4人がいる。

訪問回数、看護師や日によって違うが、1日だいたい4〜5件ほど。3ステーションでエリア分けしているおかげで、移動は片道20分以内で済む。そのため利用者宅での滞在時間を長

管理者会議で話し合う看護師たち。毎月1回、管理者同士が一堂に会する貴重な機会だ。横浜市鶴見区

くでき、ほとんどが60〜90分だという。利用者は現在、約400人いる。

三つのステーションのモットーは「信頼と安心」。

「次の訪問のことを気にしてケアするのではなく、時間をかけて心のこもったケアをすることで、利用者さんの信頼を得るよう努力しています」と栗原さんは説明する。

各ステーションの管理者たちは、毎月1回集まり情報交換をする。それぞれが抱えている課題や目標などを共有し、訪問看護の質向上につなげていく。

今月6日夜の管理者会議を傍聴させてもらった。夜間・休日の訪問件数やスタッフの研修計画などについて報告があった後、各ステーションの「強み・弱み」について話し合った。第1ステーション管理者

の岡村圭子さん(50)が「非常勤の看護師が常勤に意見を言うようになった。いい雰囲気になってきた」と報告。在宅部門訪問看護教育研修課長の鈴木志律江さん(51)が「そうだね、いろんな所で、話し合っている場面を見かけるもんね」と応じた。

「間違っていないんだけど、患者に寄り添い切れてるのかな?」「時間の余裕がないのかも。でも、いい感じで(ケア)できてると思うよ」。違う目で、お互いの訪問看護をチェックし合う。

会議が終了したのは、日付が変わる直前だった。栗原さんは「本音や愚痴を思い切り出してもらおう場です。ここですっきりして、また明日からの業務につなげてもらっています」と話している。